



## キャバクラ嬢という仕事 —労働事情とキャバ嬢のライフヒストリー—

The Cabacla lady's Work

林 真希

Maki HAYASHI

### 【要旨】

この論文では現代のキャバクラとそこで働く女性、いわゆるキャバクラ嬢に焦点をあて、主に 3 つの論点から考察する。1 つ目は、キャバクラとキャバクラ嬢の現状についてである。キャバクラはどのような労働空間であり、どのような社会的役割を担っているのかについて考える。また、キャバクラ嬢になる女性はどういった経緯でキャバクラを始めたのか、その経験は女性の人生にどのような影響を与えるのかについて考察する。2 つ目は、キャバクラ嬢に特有の労働である恋愛感情労働の形態や問題について論じる。キャバクラ嬢はジェンダーに基づく女性性を求められるが、それに乗っ取った役割を演じながらも実際は女性的な魅力の他に人間的な感情をやり取りしているのである。3 つ目は、メディアで取り上げられるキャバクラ嬢を調査し、実際の現場との違いや社会に与える影響について考える。イメージが先行するキャバクラの実態を考察し、メディアのイメージとのギャップについて考察する。近年はキャバクラ嬢のメディア進出が盛んであるが、キャバクラ嬢が注目されているのはなぜかについても考察する。

キーワード：キャバクラ嬢、労働空間、恋愛感情労働

### 1. 序

#### 1-1. 本論文の目的

この論文の目的は、キャバクラとキャバクラ嬢の労働について、内側の視点から検討することである。キャバクラは、実際の現実よりも、イメージが先行している。キャバクラで生計を立てている人が多くいるが、1 つの職業として周囲から認知されているとはいえない。キャバクラは現代日本のみが存在する特殊な職業であり、現代日本の若年層の女性のひとつの職業のあり方を考える上で興味深い題材であると考えられる。

また、キャバクラ嬢の労働についても、この論文で明らかにしていく。キャバクラ嬢の

労働は、接客業に求められる笑顔、明るい雰囲気ほかに、ときに恋愛感情までもが求められる。恋愛感情が必要な仕事はどのようなものなのかを明らかにしていく。

キャバクラ嬢へのインタビューを通し、キャバクラ嬢になる人の人生を垣間見ることができる。彼女たちの人生は決して平たんではなく、そこから一般的ではないが現実としてある現代女性の暮らしや考え方を読み取ることができる。キャバクラ嬢は、近年では雑誌『小悪魔 ageha』やその姉妹雑誌『姉 ageha』の人気にも分かるように、20 代女性の生き方の 1 つのモデルとして広がりつつある。キャバクラ嬢という生き方を考察することによって、現代の 20 代女性の生き方を考察することに繋がる。

この論文の研究対象は主に静岡県静岡市である。なぜ有名歓楽街ではなく、地方の歓楽街を研究対象とし調査を行ったかという、一般的なキャバクラの実態やキャバクラ嬢がどのようなものかを明らかにするためである。

歌舞伎町や六本木などの有名歓楽街の高級クラブは、キャバクラ嬢に売り上げのノルマや客のツケを回収する、いわゆる代金回収が課されたり、キャバクラ嬢が売り上げ担当とヘルプ担当に分担されていたりと、地方のキャバクラとはキャバクラ嬢への責任や労働条件に異なるところがあり(松田 2007)、一般的なキャバクラとは言い難い。日本全国にあるキャバクラのすべてが、東京の有名歓楽街の高級クラブのようではなく、地方の駅前にあるキャバクラのような店が圧倒的に多いのである。

またキャバクラ嬢は雑誌『小悪魔 ageha』で取り上げられるように、地元志向であるといわれている。同雑誌の元専属モデルである桃華絵里は、「この先一生静岡から離れて暮らすことはないという確信があるんだ」、「私は本来生まれた場所に根を張って生きるタイプ。地元密着型の人間なんだ。」(小悪魔 ageha 2008年11月号)と自らの地元志向を語っている。地元でキャバクラ嬢人生を送るキャバクラ嬢の方が有名歓楽街のキャバクラ嬢よりも圧倒的に多く、地元で生きる女性の姿を考察することができる。そのため、静岡県静岡市を対象とした。

## 1-2. キャバクラとは

キャバクラとは、風俗産業の一形態であり、女性従業員が男性客を接待する場所である。本論文では、キャバクラとは男性客との接触をともなうサービスがなく、従業員の女性と時間制料金で、日常と違う理想の男女関係を実現させながらお酒を飲むところと定義する。

キャバクラというのは俗称であり、キャバレーとクラブという2つの単語を合成した和製英語である。語源には諸説あり、その例としてはキャバレーのような安い価格でクラブ

のような高級感を味わうことができるという説(三浦 2008)や、キャバレーのような美人キャストとクラブのように隣に座って話が出るという説がある<sup>1)</sup>。営業には「風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律(通称風俗営業法、以下風営法と呼ぶ)」が適用される。キャバクラは風営法の2条1項2号により営業許可を受ける<sup>2)</sup>。営業時間は店舗によって異なるが、20時～翌朝4時の間で営業する人が多い。また実際には酒類を主として提供するが、飲食店の届出をしているために、店内のテーブルやカウンターにはスナック菓子等の軽食が置いてある。店は通称箱(はこ)、店内の接客エリアはフロアと呼ばれる。また、1組分の接客スペース(テーブル、イス)は、通称卓(たく)と呼ばれる。

風俗業はさまざまあるが、主に風俗業と性風俗業に分類できる。性風俗は「フーズク」とも呼ばれ、直接的な性的接触や性的興奮をサービスとして提供する目的の営業であり、キャバクラはこれには当てはまらない。キャバクラの特徴は、①性的接触がない、②時間制会計ということである。①は性風俗業の最大の特徴でもあるといえるが、キャバクラでは禁止されている。

それは、キャバクラが法律上の飲食店に分類されることや、個室を設けずに接客するためである。②は、キャバクラが一般に広まる大きな要因となったものである。風俗業界は物品ではなく、サービスを提供するため、値段がはっきりしておらず、店によって料金体系が異なるために値段の予想が難しい。また法外な代金を請求されるなどの悪いイメージが先行しており、一般の人は入りにくい。

しかしキャバクラは、サービスが時間できっちり決められており、時間の代金とお酒の代金と税というように金額が分かりやすい。その例としては、店に入る前に料金が看板に明示されていたり、支払伝票に料金内訳が明示されていたりすることが挙げられる。キャバクラで支払う料金の内訳の事例を紹介する(表1)。

キャバクラは、女性が主体的に活躍する業界である。女性が活躍する他の職業と同じように、キャバクラでは女の魅力やジェンダーロール的な女性イメージを求められる。しかしキャバクラ嬢はそのような女の魅力だけを売りにしているのではない。その点については後に述べる。

キャバクラが登場したのは1984年である(下川 2007)。日本で一番初めのキャバクラは、池袋や新宿など諸説あるが、東京から始まったのは間違いないようである。そこからキャバクラが全国に広まるきっかけになったのが、1985年の風営法の大幅改正(表2)である(下川 2007)。

キャバクラは1985年の「ユーキャン日本新語・流行語大賞」で「キャバクラ」という言

葉が表現賞を受賞するなど、短期間で一般の間に素早い広がりを見せた。全国各地で「キャバクラ」が次々と広がると、業務形態の異なるものも現れた。北海道では、「キャバクラ」は性風俗店を指しており、一般にキャバクラのサービスを提供する店舗は「ニュークラブ」と呼ばれている。

地方のキャバクラは地方特有の問題を抱えている。今回調査を行った静岡市では、「静岡県迷惑行為等防止条例」<sup>3)</sup> という条例が2013年10月1日から改正され、キャバクラの客引き行為やキャバクラ嬢へのスカウト行為が禁止された。これによりもとからのキャバクラ嬢不足が更に深刻になったことや、店舗売り上げの減少などの問題が起こっている。

表1 キャバクラの料金体系

セット料金(1時間)	20時から21時	5,000円	21時からラスト	6,000円
指名代	1人目	1,000円	2人目以降	2,000円
キャバクラ嬢のドリンク代	1杯	1,000円		
延長代	30分	3,300円	60分	6,600円
消費税を含めたサービス料金(tax)		10%		
カード支払いの手数料		料金の10%		

資料 キャバクラBの料金表より

表2 風俗営業法の変遷

1948(昭和23)年7月10日	風俗営業法が施行	
1959(昭和34)年2月10日	風俗営業等取締法が施行	深夜喫茶、バーの取り締まり
	児童福祉法が施行	15歳未満は深夜喫茶に出入り禁止
1964(昭和39)年5月1日	風俗営業法が改正	深夜営業(夜10時～翌日の出)の規制強化
1966(昭和41)年6月30日		学校などの周囲にソープの新設を禁止
1984(昭和59)年2月	池袋に初のキャバクラ	その後は新宿にもキャバクラが営業
1984(昭和59)年8月8日	風俗営業法が改正	のぞき喫茶など規制強化
1985(昭和60)年2月13日	新風俗営業法が施行	警察の監督権拡大、罰則強化
1985(昭和60)年12月	「ユーキャン 日本新語・流行語大賞 表現賞」	

下川 編(2007)をもとに作成

### 1-3. 先行研究

キャバクラに関する研究は、三浦(2008)のキャバクラ嬢になりたい若者が増えている理由に関する研究がある。この研究では、キャバクラ嬢を3つのタイプに分類している。現役で本業がキャバクラ嬢(専業キャバクラ嬢)、現役だが本業は別にあるキャバクラ嬢(兼業キャバクラ嬢)、キャバクラ嬢になりたい女子(キャバクラ嬢予備軍)である。三浦はそれぞれのキャバクラ嬢に実施したインタビューやアンケートの結果から、現役キャバクラ嬢がキャバクラ嬢になった理由を、①暮らしを豊かにしたい、贅沢をしたい、②仕事がない、③学費のため、という3つの理由に分類した。

現役キャバクラ嬢は、いつまでもキャバクラ嬢でいるわけではなく、違う将来を描いており、多くの場合、美容系職種に就きたいと考えている。美容系職種は雇用が多くあるわけではなく、開業しても多額の費用が必要であるため、現実には厳しい業界である。現役キャバクラ嬢は、キャバクラでお金をためない限り、将来への道はひらけないのである。しかしキャバクラを辞めても条件のよい仕事はないため、キャバクラ嬢でいけばワーキングプアにならなくて済む。このため、学歴もない女性が社会で自立していくためにキャバクラ嬢になるというのは自然な流れで、キャバクラという場所は格差社会における緩衝装置になっていると三浦は分析している。

水商売については、日本のホステスに焦点をあて、日本のホステスの特異性やサービス、日本社会との関わりなどについて松田さおり(2008、2009)が研究している。他国と違い日本のホステスはセックスサービスと結びつかず、むしろそれをご法度としている。これは、戦後日本の経済成長や、企業の接待交際、銀座など高級街の持つ立地と象徴性から生まれた日本のホステスの特徴である。銀座のホステスは、性サービスを提供するのではなく、高級街で行われる社外企業活動(接待)を円滑に進めるために、「お客様の地位に合うように心がけること」、「銀座らしさを保つこと」を

仕事としていくことになったのである。また、ホステスの重要な役割として、「人間関係をつくること」が挙げられている。これは、企業社会などの支配的社会において、ホステスクラブに来るような会社で実績を上げて働いている男性は、私的で親密な関係を作ることが難しかったために、ホステスがそのような「人間関係」を作る役割を担うことを仕事としたためであると結論づけている。この「人間関係」を作ることはホステスたちにとって、仕事で自分に対する「信頼」を客から得られることであり、ホステスとしての自分が認められることであるから、ホステスという仕事の喜びでもあると述べている。

社会学におけるジェンダー研究では、上野千鶴子らの多くの研究がある。本研究との関係では上野千鶴子(1989)が、戦後に高度経済成長を迎え、男性が女性を満足させる側に変化してきたため、男性が現実の女性よりも「想像」をよしとするようになってきたと述べている。男性の考える女性の魅力については谷本(2008)の研究がある。1970年代から2006年までの雑誌の恋愛記事を対象とした調査によると、男性は70年代からずっと伝統的な性別役割に沿った女性に魅力を感じている。また異性へのアプローチ行動の研究では、男性を褒める女性がよいとされ、男性を評価するような女性は好まれない。恋愛自体は、結婚に結びつかないものが増えたため、恋愛に遊びの要素が加わるようになってきたが、ジェンダーロールを理想として挙げる男性が健在だと述べている。

先行研究では、社会問題やキャバクラ嬢の労働状態に触れているが、現代のキャバクラの実態や、感情労働に関する言及はないため、この論文ではその点を明らかにしていく。またキャバクラやホステスクラブを対象とした調査では、東京の高級クラブを対象とした調査が多いが、この論文では高級クラブではなく、一般的なキャバクラについて述べていく。

#### 1.4. 研究方法

研究方法は、主にフィールドワークと聞き取り調査である。2010年7月から2011年1月まで、静岡市のキャバクラAにスタッフとして参加しながら、参与観察をおこない、同店のスタッフに聞き取り調査を行った。2012年9月から2013年1月まで同市内のキャバクラBで同様に参与観察をおこない、同店のスタッフに対して聞き取り調査を行った。その他に2012年9月に同市内のキャバクラCとDでそれぞれ1日、観察を行った。その他にキャバクラ嬢経験者4人に対して簡単な聞き取り調査を実施した。またキャバクラに行ったことがない、関わったことがないという人に対して、簡単なキャバクラに対するイメージについての聞き取り調査を行った。インタビューでは、半構造的インタビューを実施した。

文献調査では、社会学のジェンダー研究や風俗研究、性風俗研究の文献を中心に行った。また資料としてキャバクラ嬢を取り扱っている雑誌『小悪魔 ageha』を分析した。その他にキャバクラ嬢を題材とした漫画やドラマを分析し、キャバクラがどのように描かれているかを調査した。

## 2. キャバクラ嬢のイメージと実態

### 2-1. キャバクラのイメージ

キャバクラは80年代後半に登場以来、日本中に広まったが、キャバクラは風俗業というイメージが先行してしまい、その実態はわかりづらい。近年には、テレビや雑誌でキャバクラ嬢の特集が増えている。マスコミが取り上げることによってキャバクラやキャバクラ嬢に注目が集まり、興味を持って来店する客は増えている。しかしそのイメージが逆に客をキャバクラから遠ざけてしまうこともある。

ここでは、キャバクラが登場する漫画やドラマでのキャバクラの描き方から、メディアのキャバクライメージを明らかにする。またキャバクラに入ることがない一般の人へのインタビューや、ウェブ上に掲載されているキャバクラについての言及から、キャバクラはどんなイメージを持たれているのかを述べる。

キャバクラ嬢を題材にした漫画やドラマは数多くある(表3)。ドラマや漫画では、キャバクラ店内の装飾で華やかさを出し、一晩で数十万や数百万を売り上げる場面が描かれている。キャバクラ嬢どうしの激しい客の奪い合いや派閥なども描かれている。

一般の意見やウェブ上の意見では、ドラマ

表3 水商売を題材とした作品

タイトル	年	媒体	監督・作者	主演
お水の花道	1998	漫画		
お水の花道 女30歳ガケツチ	1999	ドラマ	原作：城戸口静 作画：理花	財前直見
新・お水の花道	2001			
女帝 SUPER QUEEN	2000	映画	原作：倉科遼 作画：和気一作	小沢真珠
女帝 薫子	2006	漫画	原作：倉科遼 作画：和気一作	
女帝	2007	ドラマ	原作：倉科遼 作画：和気一作	加藤ローサ
嬢王	2004	漫画	原作：倉科遼 作画：紅林直	北川弘美
	2005	ドラマ		
嬢王 virgin	2009	漫画	原作：倉科遼 作画：紅林直	原幹恵
嬢王3〜Special Edition〜	2010	ドラマ		

出典：「ウィキペディア Category：水商売を題材とした作品」（2013年11月11日アクセス）をもとに作成

や漫画の様子をそのままイメージとして受け止めている例もある。

「え？水商売のトップって、銀座赤坂六本木のホステスで、客は政治家とか商社の幹部とかじゃないの？歌舞伎町って、そのへんのチャライあんちゃんが遊ぶところで、動く金も、大した事ないんじゃない？歌舞伎町でトップになれたからって、天下を取ったみたいで大騒ぎしなくても。大体、水商売のトップって、何？富豪の妻の座をゲット！とかでしょ？(中略) 内容も、もっとエグい暴露話とか、女同士で盛大に引っかきあうケンカとか期待したんだけど、微妙に大人しい。」<sup>4)</sup>

「カリスマキャバ嬢～カリスマホストとか、ルックスが優れてるだけで全く苦勞無しで金稼いでて、しかも莫大な大金を、不快極まりない、世の中不平等。」<sup>5)</sup>

キャバクラという店や業界にはいかがわしいイメージがやはり強い。また、キャバクラの特徴である明朗会計が広まっておらず、料金が不明瞭であり、高額請求を受けるといったイメージが持たれている。キャバクラ嬢に対しては、楽をしてお金を稼いでいるというイメージが多く、それに甘んじていると見られているキャバクラ嬢には厳しい意見がある。

「生きるためにキャバクラで働くことは仕方ない。キャバクラが楽しいとか、お金が楽しく稼げるとか“ちゃんとしてない”理由なら嫌。次のことをちゃんと考えているの？と思う。」<sup>6)</sup>

この意見ではキャバクラ嬢に対して、楽にお金を稼ぐことのできる楽しい仕事というイメージを持っている。そしてそのような理由からキャバクラ嬢になることは「ちゃんとしてない」ということであり、どうしてもキャバクラで働かなければならない、生活のため

というような「ちゃんとした」理由のないキャバクラ嬢は敬遠されている。

キャバクラ嬢は近年、キャバクラだけでなく、テレビや雑誌などのメディアに進出している。キャバクラはイメージが先行する世界であるが、そのイメージを作り出してきたのはキャバクラを題材にした雑誌やドラマの影響が大きい。2000年から始まったドラマ『女帝』シリーズや2004年から始まったドラマ『嬢王』シリーズなどのドラマでキャバクラに注目が集まり、キャバクラ嬢の人数も増えたといわれる。

実際のキャバクラ嬢に注目が集まったのは、2006年に創刊された雑誌『小悪魔 ageha』の影響が大きい。10代後半から30代を読者層としているファッション誌で、2008年には発行部数30万部を突破した人気雑誌である。紙面には現役ギャルモデルの他に読者モデルが登場する。この読者モデルには、さまざまな職種の女性がいるが、圧倒的にキャバクラ嬢が多い。また、読者モデルのキャバクラ嬢は勤務先店名を任意に公表し、彼女たちの実際に働いている場面を紹介する企画が度々ある。紙面に登場するキャバクラ嬢の勤務店の求人広告も載せられている。他のファッション誌と違う所は、キャバクラ嬢に焦点を当て、キャバクラの様々な面を載せていることである。キャバクラ嬢のきらびやかな衣装や派手なヘアアレンジ、高額な収入を紹介する反面、読み物企画などでは紙面に登場するキャバクラ嬢自身によって、仕事の精神的な負担が多いことや、仕事の成績に対する不安なども語られている。

この雑誌でキャバクラ嬢やモデルたちが若い女性に人気となり、モデルプロデュース商品やモデルが立ち上げたファッションブランド等も好評である。モデル自身が会社を立ち上げ、ブランド展開している例では、元専属モデル桃華絵里のブランド「Moery」や専属モデル(2013年11月現在)武藤静香のブランド「Rady」などがある。また雑誌と企業とのコラボ商品も多数販売されている。例として「小

悪魔 ageha 公認アイラッシュ」や「小悪魔 ageha 公認ファンデーション」などがある。普通のキャバクラ嬢から、雑誌で名を上げて会社を立ち上げ、女社長として活躍したり、新しい仕事を始めて成果を上げたりしているモデルを多数輩出している。このような姿が、キャバクラ嬢出身女性のサクセスストーリーとして現代のキャバクラ嬢のあいだに広まっている。

## 2-2. キャバクラ嬢の仕事の実態

### 1) キャバクラ嬢の労働条件

キャバクラ嬢の給料は時給制と歩合制の組み合わせで、店や地域によって時給や歩合は変わってくる。

時給については、歌舞伎町で約 4,000 円、名古屋で約 3,000 円、静岡で約 2,000 円が相場である。これは新人で入った場合であり、ここから売上や出勤日数などによって時給は上がっていく。時給の設定は店によって異なるため、金曜日と土曜日を含めた週 5 日以上出勤した場合、レギュラー出勤手当で時給が上がる店もあるが、売り上げが一定に達しなければ時給は上がらないという店もある。

ちなみに各地の最低賃金は、厚生労働省のホームページによると平成 25 年で東京都が 869 円、愛知県が 780 円、静岡県が 749 円と

なっている<sup>7)</sup>。キャバクラの時給と比較すると、キャバクラの方が最低賃金よりも東京で約 4.6 倍、愛知県で約 3.8 倍、静岡県で約 2.6 倍も高い。三浦(2008)にもある通り、キャバクラ嬢になろうと思う理由で大きいのが金銭的理由であるのは、当然であるといえる。最近では、社会保険や託児所を完備した店もあり、子供のいる女性にも働きやすくなっている。子供のいるキャバクラ嬢や既婚者のキャバクラ嬢も少なくない。歩合はバックと呼ばれ、店のサービス料金が割合に応じて給料に反映されるシステムである。たとえば本指名のバック率が 50%の場合、指名料金 1000 円のうち、その 50%の 500 円はキャバクラ嬢の歩合分として給料になるというシステムである。バックがつくサービスは主に、キャバクラ嬢へのドリンク代、本指名・場内指名代指名された場合の延長代、同伴代である(表 4)。

店によっては、アフターと呼ばれるキャバクラ嬢が閉店後も客と店外で過ごすサービスにもバックがつく場合もあるが、これは確認が難しいため、バックがつく店は稀である。また店によってバックの割合は異なる。事例として調査したキャバクラ B ではドリンク 20%、指名・延長 50%、同伴 100%であった。

手当は、駐車場代と託児所代、衣装代、交

表 4 バック表の事例

		1セット目	60分延長	30分延長
本指名		1,000円	1,000円	500円
		プラス	プラス	プラス
同伴	21:00 まで	3,000円	1,000円	1,000円
	21:30 まで	2,000円	1,000円	500円
	21:30 以降	1,000円	1,000円	500円
場内指名		500円	500円	500円
その他のバック				
ドリンク一律	200円	(指名 有無 関係なし)		
ボトルバック	20%	(本指名に限り)		

資料 キャバクラ B の例より作成

通費、ヘアセット代などの一部を、店側が負担することがある。負担の割合は店によって異なる。キャバクラDでは、出勤の前にヘアセットサロンへ行くことが通例となっており、店側がヘアセット代の50%を負担している。キャバクラBでは、自家用車で通うキャバクラ嬢もいるため駐車料金を500円まで店側で負担している。

女性がキャバクラ嬢として店で働くためには、まず働きたい店に電話やメール等で連絡を入れ、面接の日時を決める。これは他の仕事と同じである。しかしキャバクラの場合は面接と同時に、たいていは体験入店、または1日体験といって面接後すぐに仕事を始める場合が多い。その際に簡単な仕事の所作をスタッフから聞く。マニュアルは特にないが、丁寧に説明する店ではバック表や時給表、簡単な働く上での注意事項を書面で説明するところもある。

キャバクラの仕事は、給料が高く出勤にも融通が利くこともあり、キャバクラ嬢の遅刻や無断欠勤などの恐れがある。そのため、遅刻や欠勤にはペナルティーが設けられている店もある。キャバクラBでは、無断遅刻に1,000円、平日の当日欠勤に5,000円、週末・祝日前の欠勤に10,000円、無断欠勤20,000円のペナルティーが設けられている。売り上げの大きい店や競争の激しい有名歓楽街では、売り上げのノルマが達成できなかったときや、指名客の人数が少なかったときにもペナルティーが科される場合もある。

その他、店には無料で借りることのできる店内衣装や、店の従業員による送迎がある。店内衣装は、初めから貸出用として用意されるものの他に、以前その店で働いていたキャバクラ嬢が残していったものや、在籍しているキャバクラ嬢の私物の中で着なくなったものが使われる。店の従業員による送迎については、店長やフロアスタッフが閉店後にキャバクラ嬢を自宅にまで送ることがある。出勤前に従業員がキャバクラ嬢を迎えに行くこともあるが、それは極めて稀である。閉店後に

は交通機関がなくなる時間帯であるため、自家用車で出勤しているキャバクラ嬢や店長、フロアスタッフなどがそれぞれ乗り合わせてキャバクラ嬢を自宅にまで送っている。

キャバクラにはキャバクラ嬢の他に、出資者、マネージャー、店長、フロアスタッフ(ボーイ、黒服)が関わっている。出資者は主に店の運営資金を出し、店で直接働くことはないが、運営に関して指示を出すこともある。マネージャーは、出資者から経営全般を任されており、実質的な店の経営者である。店の仕事もこなすが、常に店に出勤するわけではない。届け出や許可は、マネージャーか店長の名前で行う。店長は、店の運営責任者である。営業日にはかならず出勤し、店の経理や従業員のシフトを組むこと、掃除などの雑用もこなす。客前に出てお酒をつくる、街頭に出てお客を呼び込むことにも精を出す。フロアスタッフは、通称ボーイや黒服と呼ばれる。店長の仕事のサポートが主な仕事である。

今回フィールドワーク調査を実施したキャバクラのいずれも、店自体は個人事業主という形である。そのため一般の企業にみられるような社会保険はない。キャバクラで働く人たちは、兼業している別の仕事で社会保険に入っているか、あるいは国民保健に入っている。一方で数は少ないが法人化しているキャバクラもある。長い年数にわたって営業をしていて実績がある店や、スタッフの人数が多い大型店は会社化する場合がある。

キャバクラ嬢は税法上では個人事業主とされている。店側が場所を貸し、キャバクラ嬢がそこで営業をするというかたちである。事業主であることで、厳しい罰則や客からキャバクラ嬢への個人的な贈り物なども可能となっている。しかしキャバクラ嬢は完全な事業主ではなく、労働法で労働者となる場合もある。2009年には東京都内のキャバクラに勤務しているキャバクラ嬢が、待遇改善などを求める労働組合「キャバクラユニオン」を結成した。キャバクラ嬢と店との関係は明確にされておらず、労働条件や雇用形態などが店に



よって異なる。店側もキャバクラ嬢に対して詳しい雇用形態を説明することはない。そのため、キャバクラ嬢と店の関係は曖昧になってしまい、トラブルになることもある。

## 2) キャバクラ嬢の仕事内容

キャバクラ嬢の1日の仕事の流れをみていこう。出勤時間は店によって異なるが、開店時間の20時か21時に全ての用意が整った状態で待機席にすることが出勤の合図になるため、間に合うように各自出勤する。15分前でも30分前でも自由であるが、タイムカードで出勤確認する場合は、すべて用意が整ってからでないカードを押すことができない。

開店時間を過ぎて客が来店したら、待機中の全員は起立して「いらっしゃいませ」と迎える。客が特定のキャバクラ嬢を指名したら、そのキャバクラ嬢が中心となって接客する。客が指名をしないフリー客である場合、待機中のキャバクラ嬢の中から店内(フロア)を仕切っているボーイが接客するキャバクラ嬢を決める。客が複数の場合は、客の数と同数のキャバクラ嬢が接客にあたる。

接客中は酒を作ることや灰皿交換などをしながら、会話でその場を盛り上げる。その際は、客との会話を途切れさせないように、キャバクラ嬢とボーイとはサインでやり取りをする。サインは様々あり、灰皿やアイスボックスの交換サインや、おしぼりを要求したり、カラオケの要求をしたりすることをサインで表している。キャバクラ嬢がボーイを呼ぶときは「お願いします」と呼び、ボーイがキャバクラ嬢を呼ぶときは、キャバクラ嬢の源氏名に「さん」をつけて呼ぶ。これはキャバクラ嬢と客の空間の中にボーイが入り、その空間を現実味を帯びた空間にしてしまうことや、客にキャバクラ嬢とボーイの関係を考えさせないようにするためであると思われる。

キャバクラ嬢とボーイは、接客が始まってからは会話ができない。そのため、キャバクラ嬢が客につく前に客の情報を交換しておく。また、客がトイレに立った時は、キャバクラ嬢もトイレへ案内し、トイレの前で新しいお

しぼりを持って待機する。この間にキャバクラ嬢とボーイで情報交換をする。どうしても客と相性が合わなかったり、問題があったりした時には、この間にキャバクラ嬢からボーイに要請し、接客する卓を変更してもらうことも可能である。客がトイレに立たないが、客に知られないようにボーイに伝えたいことがある場合には、キャバクラ嬢自身がトイレに立って席を離れた際に情報を交換する。

フリー客の場合は、15~20分ごとに接客するキャバクラ嬢が交代する。その際、キャバクラ嬢は各自の名刺を客に渡し、自分の顧客とできるようにする。工作中的キャバクラ嬢は、客からの指名を受け、自分の顧客を確保することを目指している。顧客を獲得することで、自分の歩合が増え、また定期的な来店が見込める。指名の数がキャバクラ嬢の売り上げにも影響するので、指名はキャバクラ嬢にとってとても大切である。

指名には場内指名と本指名という2つのシステムがあり、フリー客がキャバクラ嬢を指名すると、その指名は場内指名という1日限りの指名となる。客が来店時にキャバクラ嬢を指名した時は、その指名は本指名となる。本指名は、1日限りではなく来店するときには必ず指名するというシステムである。指名を受けていないキャバクラ嬢が違うキャバクラ嬢の指名客にヘルプについたときでも、連絡先交換や自分の名刺を渡してはならないというキャバクラ嬢どうしの暗黙の了解もある。

キャバクラは時間制料金であるから、基本は1時間を1セットと考える。1セットを過ぎると延長料金になる。1セットだけでなく客に延長をさせることもキャバクラ嬢の技術の1つである。もともと延長するつもりのない客でも、キャバクラ嬢のそれまでの接客や、延長をお願いするトークの駆け引きで延長することもある。セット料金はバックされないが、延長料金は指名のキャバクラ嬢にバックされるため、キャバクラ嬢は延長を取ることにも実力のうちとされている。1セットを過ぎる15分前くらいになると、ボーイがチェック

(会計)か延長かを客に尋ねるか、ボーイがキャバクラ嬢に時間を告げ、キャバクラ嬢が客にチェックか延長かを告げ、その答えをボーイに伝える。伝える際にもサインが使われる。

客が退店するときは、会計の明細を店のボーイが出し、金額を書いた紙を指名のキャバクラ嬢、フリーの場合は中心となって接客をしているキャバクラ嬢に渡す。その後キャバクラ嬢が客に料金を告げ、客から料金を回収し、またボーイに渡す。その間も接客はかささず、トークは続ける。ボーイが会計を終え、お釣りをまたキャバクラ嬢に渡し、キャバクラ嬢が客にお釣りを渡す。領収書を出す場合も同様に、キャバクラ嬢が客と店側の間に立ってやり取りする。それはキャバクラの営業がキャバクラ嬢の自営であり、店側はそれをあくまでサポートするだけという考えや、キャバクラの特殊空間にボーイが入らないようにして現実味を出さないようにするためであると思われる。

客の会計が済んだ後は、コートや傘などの預かり品を渡し、席に忘れものなどが残っていないかを確認した後で店の外まで客の見送りをを行う。その際、なかなか席を立たない客の場合はキャバクラ嬢が先に席を立ち、退店を促す。客が歩き始めたら、その後ろに着き店の外までついていく。

キャバクラ嬢の仕事は一言でいえば接客であるが、その接客の仕方はキャバクラ嬢によって異なる。何を話すか、どのように盛り上げるか、また店に来てもらうために何をするかは、マニュアルでもなく、教えられるでもなく、様々な人に接客をして自分で習得するキャバクラ嬢特有の技術である。キャバクラ嬢の接客は、基本的に客の話を聞き、とにかく客を褒めて機嫌を良くさせることである。同じ業界のホストクラブの接客は、客がお金をかければかけるだけホストが客の要求に応えるようにし、そうすることで客にホストの言うことを聞かせることを目的としている(飯野 2010)。

ホストクラブとキャバクラの接客の違いは、ホストとキャバクラ嬢の労働条件や給料の違いからくるものと思われる。キャバクラは基本時給が高く、歩合は少なめに設定されている。ホストクラブは基本時給がキャバクラより低い、歩合の割合がキャバクラより大幅に高い。また営業体系にも違いがあり、キャバクラは経営者や店長が店舗運営しキャバクラ嬢は経営に関与しないが、ホストクラブはホスト自身が出世すると役員になり店舗運営に関わったり、新規に店舗をオープンしたりすることがある。店舗の経営体系の違いがホストやキャバクラ嬢の労働にも影響している。

キャバクラ嬢の接客に戻ると、また店に来てもらうために一番早いのは、客がキャバクラ嬢に対して好意を持つことである。キャバクラ嬢が意図的に、自分が客に好意を持っているように装い、心理的な返報性を利用して客に自分への好意を持ってもらうという方法がある。これは色恋営業と呼ばれる。また、キャバクラ嬢に色恋営業の意志はなくても、接客していくうちに客に好意を持たれることもあり、これも色恋営業となる。色恋営業はキャバクラ嬢の典型的な技術であるが、実際に客とキャバクラ嬢が恋愛関係になるということはない。キャバクラ嬢が色恋営業で客を手中に収めているからである。しかしながら客と恋愛をして水商売を引退することも、キャバクラ嬢の典型的な引退ストーリーのひとつである。

キャバクラ嬢の仕事は、先に述べたように実践で学ぶしかない。仕事のやり方を学ぶには、初めから1人で接客をするのではなく、まずは先輩キャバクラ嬢と同じ卓について接客をすることから始める。先輩キャバクラ嬢の客や、団体客を何人かのキャバクラ嬢で接客する、という場合が多い。先輩キャバクラ嬢の仕事の手つきや話し方等をその場で見て、その手伝いをしながら技術を習得していくのである。灰皿の交換やお酒の作り方などはすぐ覚えられるが、仕事の中で最も重要な「客

と話すこと」は、その時々で客が違うので全て同じというわけにはいかない。

店舗Bでは、客と会話する際の簡単な道筋が示されていた。それによると、キャバクラ嬢は「話し上手」であるように見せて、本当は「聞き上手」に徹することがよいとされている。簡単に言うと、客からは「話の上手な子」と思われるが、実際はそんなにキャバクラ嬢は話さず、客の話を聞いているようにする、ということである。また店舗Bのボーイによると、売れるキャバクラ嬢とは、自分が客を楽しませるのだという積極性を持った人や、自分で売上額や貯金額などの目標設定があったり、日々の生活がキャバクラでの仕事にかかっていたりという人は売れるという。

キャバクラ嬢は接客業であり、接客のなかで客に好意を持っているように装わなくてはならない場合がある。笑顔でいることは前提で、接客中には気配りが求められ、客からの要求には可能な限り応えなくてはならない。キャバクラ嬢を触ることは禁止されているが、ドレスは露出が多く、客と客の間にキャバクラ嬢が挟まれるように座るので、客がキャバクラ嬢を触ることは日常茶飯事である。キャバクラが近隣にたくさんあり、キャバクラ嬢もかなりの人数がいる中では、程度が極端にひどくない限り、客の機嫌を損ねて客を逃がさないために、キャバクラ嬢への接触は暗黙の了解としてキャバクラ嬢自身も見逃さなければならない現状がある。

キャバクラ店内での仕事は接客である。接客は、客が途切れて待機とされない限り休憩もなく働く。しかし1日の仕事が終わってからもキャバクラ嬢の営業は終わらない。客が来店した翌日には、来店し話げができたことへの感謝をこめてメールや電話で連絡をする。1通で終わらせることなく、他愛ない世間話も織り交ぜながら連絡をとりつづけることで、キャバクラ嬢は客とのコミュニケーションを深め、キャバクラ嬢が来店をお願いしやすいような雰囲気を作り、客が来店しやすいようにする。

メールや電話で連絡を取り合うことはすべて仕事時間外でのことであり、キャバクラ嬢の業務内容には含まれていない。しかし客との連絡を常にとれる状態を保つことで、客の情報も得ることができ、来店しやすそうな日に連絡を入れることや、接客の会話を合わせるができる。客に来店依頼の連絡だけでなく他愛ない話題でも連絡を取り合ううちに、客に「キャバクラ嬢とその客」という関係ではなく「友達の女の子と自分」あるいは「自分に気のある女の子と自分」というように関係性を変換させることができる。

キャバクラ嬢は客に「彼女は自分だけに話してくれる」「自分は彼女の大変な部分も分かっている」という気持ちを持たせ、キャバクラ嬢ではない1人の女性としての認識を持たせることによって、客の来店を促し、本指名や延長を取りやすくしている。勤務時間外で客との連絡を取り合うことで、勤務時間中の接客を増やし、成績や売り上げを増やしている。

### 3) キャバクラ嬢の装備

店内におけるキャバクラ嬢の装いは、キャバクラ嬢の使用を前提として作られた、いわばキャバクラ嬢専用の衣装を着用する。ドレスやスーツにビーズ加工やラメ加工がされており、丈は長短さまざまである。形はほとんどのドレスが肩から胸の谷間が出ている格好で、その他はデザインによって背中が見えたり、足の部分にスリットが入っていたり様々である。露出の多いドレスやスーツでは寒い時や、下着が見えそうなきなどは、ドレスやスーツの上にショールやカーディガンを着用する場合もある。

ドレスに合わせて、ヒールの高いミュールサンダル等を履く。ヒールは、一般に女性が履いている高さは10cm以下が多いのに対し、キャバクラ嬢は13cm前後のヒールの高さがある。

キャバクラ嬢は店内で自分の所持品を入れておくために、手持ちのバッグを使用する。一般に結婚式の二次会等で使用されるパーテ

イーバッグや、ブランド品のポーチ、キャバクラ嬢向けに販売されている装飾の派手なバッグなど様々で、自由に自分の好きなバッグを使用できる。バッグの中には接客に必要なライター、名刺、トーション(キャバクラではミニハンドタオルのことを指す)筆記用具を必ず入れ、その他に携帯電話やメイク道具、飴など自分の必要に応じて好きな物を入れている。

### 3. キャバクラ嬢の語り

本章では、先行研究で取り上げた三浦(2008)が、キャバクラ嬢へおこなったインタビュー資料と、筆者が独自におこなったキャバクラ嬢や元キャバクラ嬢へのインタビュー、質問紙回答から、キャバクラ嬢の価値観や人生について述べる。独自のインタビューでは、2013年5月15日に現役キャバクラ嬢Aさんにインタビュー、BさんとCさんにはメールで質問し、回答を得た。また元キャバクラ嬢Dさんに質問をし、回答を書面で受け取った。

質問項目は以下のとおりである。

【現役キャバクラ嬢、元キャバクラ嬢へのインタビュー】

- ・高校は行ったか、卒業したか
- ・何歳から水商売、キャバクラを始めたか
- ・なぜ始めたのか、そのきっかけ
- ・働く前のイメージと実際に働いた時との違い
- ・ほかの仕事と、キャバクラとの違い
- ・接客スタイルとその確立までの道のり、自分の売り、自己表現の仕方は?
- ・将来の夢、目標
- ・働いていて楽しいこと、つらいこと
- ・仕事でお客様に対して、自分が恋愛の好意を持っているように装うことについてはどう思うか。自分がそういう接客をした時、どんな気持ちだったか
- ・やめる(た)タイミング

- ・同じ給料がもらえる、水商売でない仕事があっても、キャバクラで働こうと思うか、その理由
  - ・月の経費(化粧品代や衣装代など)はどれくらいか、それを自腹で出すことについてどう思うか
  - ・男性との関係性について。お客さん、従業員、プライベートで会う人はどんな存在か
  - ・女性との関係性について。同僚、プライベートで会う人(友人)はどんな存在か
  - ・お客さんとはどんな関係でありたいか。仕事を辞めても連絡をとるか
  - ・キャバクラ(嬢)は世間はどう思われていると思うか、それに対してどう思うか
  - ・キャバクラはどんなところだと思うか
- 【キャバクラスタッフ(ボーイ)へのインタビュー】
- ・保険はどのような形態か
  - ・キャバクラの一般的な料金例
  - ・キャバクラの魅力
  - ・売れるキャバクラ嬢とは
  - ・県迷惑防止条例について
  - ・長く在籍するキャバクラ嬢が多い店には、どんな理由があるからだと思うか

以下、三浦の文献からのインタビュー引用には(事例1)のように記し、筆者がおこなったものには(Aさん)や(Bさん)と記す。

#### 3-1. キャバクラ嬢になるまで

キャバクラ嬢になる理由については先行研究の資料やインタビューから、やはり経済的理由を挙げてキャバクラ嬢になることを選ぶ人が圧倒的に多い。

##### (事例6) 専業24才

最初はキャバクラで働くのは先入観でイヤだったんですけど、借金も返さなくちゃいけないし、お金のためにとまって体験入店してみたら、意外と普通でした。

(Aさん) 高校に行こうと考えなかった。卒業できる自信がなかったし、私立しか行けない学力だったので、中退するなら行かないほうがいいと思った。母親の入院費、治療費と、弟の学費が必要になったのでキャバクラを始めた。

#### (事例14) 兼業 介護士 26歳

キャバクラで働き始めたのは、介護士だけだと働いている以外の時間が暇だし、給料が安いので自由にできるお金が少ないからです。キャバクラは時間を合わせて働けるし、お年寄りから文句を言われる介護の仕事と違って、お客が自分にチャホヤ優しくしてくれるので非常に癒されます。

経済的なもの以外の理由では、暇な時間の有効活用のためや、華やかな世界に憧れてという理由があげられる。学歴を見ると高卒や中卒が多く、卒業後に特定の職業に就くことがなくアルバイトを続けた結果、給料が高いキャバクラを選んでいる。専門学校を卒業している人も多いが、美容やアパレル、介護といった業界はもともと給料が高くなく、生活費や遊覧費のために兼業で短時間に高収入を得られるキャバクラ嬢を始めるというケースもある。

### 3-2. キャバクラ嬢の技術

キャバクラ嬢は他の職業より、見た目に気を遣う職業である。しかしながら接客が仕事の中心であるため、その接客技術が見た目よりも重要である。キャバクラ嬢の接客の仕方、灰皿の交換といった雑務以外のトークや客との接し方は、営業スタイルや接客スタイルと呼ばれる。これは人によって違いがある。

(Aさん) (キャバクラを)始めた当初は完全に見た目と若さを売りにしていた。今はしゃべりが売り。

(Cさん) 色々な接客業を経験していて、よくしゃべっていたから。しゃべり重視！

インタビューでは、しゃべる事が好きなので、客を引き付けるしゃべりをすることや、賑やかに盛り上げることが自分のスタイルだという場合が多かった。このような友達のように接する接客は友達接客と呼ばれている。他にも先行研究の資料では、自分を口説いてくるお客さんを騙すというような、客の下心を利用し、恋人どうしのように振る舞う色恋接客もある。

(Dさん) 自分が色恋(接客)をしていなくても相手に好意を持たれることが多いし、その色恋の時間を楽しんでる人もいる。人によっては色恋をすることもあるし、必要である。相手に自分が好意を示さなくても色恋になってしまうケースが多い。

(事例9) キャバクラで働くようになって、話題のために話し方の本やスポーツ誌、DVDを片っ端から見ようになりました。負けず嫌いなので、接客が上手いかなかったり、成績が上がらなかつたりするとお金も増えないし、チクショー！てなって悔しいんです。

友達接客と色恋接客がキャバクラ嬢の接客スタイルでは定番である。キャバクラに来る客は下心を持って来店する客が多いので、自分から色恋接客をしているつもりはなくても、そうになってしまうことがほとんどである。始めから友達接客や色恋接客にしようというのではなく、客の様子や反応を見てどのように接客することが望ましいかを判断し、接客をおこなう。そのため自分の指名客すべてが色恋接客の客であったり、すべてが友達接客の客であったりということはなく、客によって接客スタイルを使い分けている。

実際に接客でする所作は、先輩や男性スタッフから教わる。客と話す内容は、簡単な話し方や注意は教わるが、たいていは自分で

様々な客に対応できるよう日々話題になることについて探しておく必要がある。

### 3-3. 労働条件

キャバクラには特殊な労働条件がいくつかある。遅刻や欠勤に科されるペナルティーのほか、出勤の融通が利きやすいことや仕事に使う道具などが全て自前でまかなわなければならないことなどがある。仕事にはヘアセットや店内衣装が必要であるが、それらはヘアセットが半額負担だとすると約 1,000 円から 1,500 円、店内衣装は全て自前で約 2,500 円から数万円のものまである。出勤日ごとにヘアセットをし、週に 5 日の出勤をすると、1 週間で 5,000 円超の経費を自己負担することになる。

(A さん) (仕事に使う経費は)月に約 5 万。自分の輝けるもの、好きなものだから、自分でお金を出すのは当然。

(D さん) セット代(2100 円/1 回)のうち 1,050 円は店持ち。ドレス 1 着につき 2~5 万くらいを、少なくとも月 2 着購入。

高額な経費を使う理由には仕事のためであるという理由もあるが、その他にキャバクラ嬢自身の好みや興味のためでもある。仕事で自分を美しく見せられるものは自分で選び、身に着けるという意識がある。新しい衣装や普段できないヘアセットをすることで仕事に対するモチベーションも維持している。

### 3-4. 労働観

キャバクラで働くことをキャバクラ嬢はどう思っているのか。仕事に対する思いや、他の仕事と比較してキャバクラの仕事はどういうものかと思っているのかを聞いた。

(A さん) (以前にレストランの接客を経験して)レストランは体力、キャバクラは精神力を使う。今はキャバクラを一生懸命やりたい。

(同じ収入の違う仕事があっても)キャバクラをやりたい。楽しいから。

(D さん) (キャバクラは)短時間でお金を稼げる分、精神力が必要。頑張るほど、人より多くの我慢をするほど、結果が出る。

キャバクラという仕事は精神力を使う。人と対峙するサービス業には全て共通であるといえるが、キャバクラ嬢が精神力や我慢をより必要とされるのは、客からの色目線や接触到に笑顔で対応し、客への好意や恋愛感情を時には自分で装うことが求められるからである。

(事例 30) 看護の仕事をめざしているのですが、お客様に優しく接するのはイヤではないのですが、逆に色恋営業ができないので向いてないのかもしれない。たとえば、お客様が店外デートや恋愛関係を望んでいるのに、それに応えず、お店に来店させるのは心苦しいです。だからお客様に気に入られると、プレッシャーになります。気に入られた状態を壊さないようにするのに、神経を遣います。

キャバクラ嬢という仕事には色恋接客、つまり疑似恋愛をしなくてはならないことほどのキャバクラ嬢も理解している。しかし恋愛感情を強いられることや、客の要望を分かっているのに応えないこと、客の前で本来の姿ではない自分であることに、仕事でありながらも罪悪感を覚えてしまう。

### 3-5. 人間関係

キャバクラは毎日違う客が訪れ、キャバクラ嬢やフロアスタッフも短期間での入れ替わりが多い。そんな中でたくさんの人間関係が構築されている。そこにはキャバクラ嬢ならではのの特徴がある。

(A さん) 従業員、同僚は仕事仲間であり、仲良くしようとは思わない。友達を作ったり、遊んだりするところではないから。お客様

は、自分のタイプだったら恋愛したいけど、お客さんという自分は作った自分。

同僚には仕事仲間という意識がある。売り上げや指名数を競っているキャバクラ嬢どうしは、プライベートの友人と同じような関係を作ることは難しい。しかしメディアで取り上げられるようなキャバクラ嬢どうしの激しい争いなどは現場で起こることはない。トラブルがあったときは、間に店長やボーイなどのスタッフが入り、話し合いをもつ。当人どうしで対峙することがなくても解決することもある。キャバクラ嬢とスタッフの間にも仕事仲間としての信頼関係があり、何かあればすぐに相談する関係ができています。

(事例 24) キャバクラで働き始めてから、考え方がプラス思考になりました。男性スタッフが持ち上げてくれることもあるのですが、いろいろな成功したお客さんと話せることが大きいです。

(事例 2) キャバクラであれば、スタッフも男性だし丁寧。怒られたりしません。

キャバクラ嬢の仕事を円滑にするためには、ボーイや店長などの男性スタッフの関わりも重要なのである。

キャバクラ嬢とその客のあいだには、はじめに本来の自分ではないキャバクラ嬢と素のままの客という関係がある。それとは別に、初めから素のままの自分でいられるキャバクラ嬢もいる。

(D さん) 私とお客様は友達のような相談事にのってくれる方や、娘のように可愛がってくれる方、接待などの大切な場所に私を紹介してくれる方、中には何年も想い続けてくれる方もいますが、時間をかけて少しずつ今は素のままの自分でいれるようになって、その素の自分を応援してもらえるのが本当に嬉しい。

キャバクラ嬢として長く偽りの自分を見せつけることに疲労を感じ、少しずつ時間をかけて素のままの自分を出し、色恋接客や友達接客の客でもない新しいキャバクラ嬢と客の関係を作る。キャバクラ嬢と客ではなく、1人の人間どうし関係を再構築するのである。

### 3-6. 恋愛観

仕事において疑似恋愛を要求されるキャバクラ嬢は、私的な恋愛に関してどのような考えを持っているのか。恋愛に関してというよりも、結婚願望の強いキャバクラ嬢は多い。将来の自分はどうなりたいかという質問に対し、「結婚したい」という回答が多い。キャバクラ嬢という不安定な職業ゆえに安定を求める気持ちも強いが、その他に自分の仕事を理解し支えてくれる人を求めている。

しかし、結婚を望まないキャバクラ嬢もいる。

(事例 11) 男性に対しては最初から冷めていたのですが、キャバクラで働き始めてからさらに冷めて、人を信じなくなったし、ホンネは言わなくなりました。今は結婚もしたくありません。

仕事での人付き合いに疲れ、結婚や恋愛に興味を持てなくなることもある。恋愛感情を仕事で要求され、男性が恋愛遊びをしているところに居合わせているキャバクラ嬢ならではの考えである。

キャバクラ嬢の恋愛は、普通の人となら変わらない。学生時代の同級生と長く付き合っていたり、夜の職業ではない人と付き合っていたりもする。仕事の同僚である店長やボーイと恋愛関係になることも少なからずある。同じ店内であれば、どちらかがその店を辞める暗黙の了解はキャバクラも同じである。そして客と付き合うキャバクラ嬢もいる。客として来店した人が自分の好みだったり、話が合って好印象を持ったりして、客に興味を持

つ。しかし正式に付き合うことになれば、客として来店することはない。キャバクラ嬢は特定の客を特別視することはできず、どの客も等しく楽しませることが仕事だからである。

### 3-7. これからの人生

キャバクラを一生の職業にする、というキャバクラ嬢はいない。キャバクラは若さも1つの売りだからである。また収入が不安定であるため、将来設計を立てにくい。インタビューや先行研究の資料をみても、キャバクラ嬢は将来結婚するか、お金をためて違う仕事に就こうとしている。

(事例 2) お店で最高年齢だし(28 歳)、そろそろキャバクラは辛くなってきたので、早く結婚して幸せになりたいです。でも家庭がほしいわけではなく、楽しく暮らしたいと思っています。

(事例 3) 将来は、平凡に生きてみたいです。今の彼氏と 26 歳くらいで結婚して、28 歳で出産したいです。キャバクラはいつまでもできる仕事じゃないし。今は、将来ずっとできる仕事を探しているんですけど、高校を卒業していないから就職が難しいです。

将来就きたい職業は、ネイル関係やファッション関係など圧倒的に美容関係の仕事が多い。専門学校で得た知識を活用できる職業や、自分の好きな分野の仕事に就きたいと考えている。しかしながら、専門学校を卒業して、その知識を生かし働き始めたところ、給料が思うより少なかったためキャバクラ嬢を始めるといふケースが多いので、キャバクラを辞めて美容系などの専門職だけで働こうという事は、矛盾しているように思える。

また、違う職業を考えていないキャバクラ嬢は、結婚を望んでいる。序で紹介した三浦(2008)にもあるように、キャバクラ嬢には結婚願望の強い人が多い。資料やインタビューからも、結婚したいという回答は多い。結婚

を望むキャバクラ嬢は、結婚して特定の職業に就かず、男性に養ってもらいながら生きていくことを理想としている。

### 3-8. キャバクラ嬢が見たキャバクラ

キャバクラ嬢になる前は、一般の人々と同じように、いかがわしいイメージを持って始める人もいる。しかし、キャバクラという場所があることによって、人間として成長することができるキャバクラ嬢もたくさんいる。

(D さん) 水商売は自分磨きをできる場所。内も外も磨ける。沢山のひととの出会いで人と人とながらっていく、自分にとってなければいけない場所だったと思う。(キャバクラは)なくてはならない場所。自分が輝ける場所。

(事例 7) キャバクラで働く前には、自分に自信がなく、人と目を合わせることができなかったのですが、キャバクラで働いてからはできるようになりました。

(事例 8) キャバクラで働いている時は、普段と違って着飾っているし、気分が違いますね。キャバクラ嬢になりきって、お客さんを楽しませよう、会話に気を遣っています。あとは常識がつかえました。新聞やニュース、テレビを見て、話題についていけるようになります。また金銭に余裕ができた分、親を食事に連れて行くなど、気持ちにも余裕ができました。

キャバクラでは多くの人と出会うことや、様々な人と会話ができる。そのため客の指名を得るために外見を常に整えておく努力が必要であるし、客に会話を楽しんでもらうために知識をつけ、その努力によって客の信頼を得ることができる。信頼を得て自信が付き、新たな人生へと向かっていけるところがキャバクラ嬢にとってのキャバクラである。



## 4. 考察

### 4-1. キャバクラ嬢の人生とキャバクラ

普通の女性が、何かしらの理由(大半は経済的理由)でキャバクラ嬢になることから、キャバクラ嬢という人生が始まる。キャバクラという場所で過ごす期間の長短にかかわらず、その経験は後の人生に影響を与える。キャバクラで活躍し名を挙げて会社を経営したり、キャバクラで出会う人と結婚したりとその後の人生はさまざまである。学校を卒業し自分がこの先どう生きていくのかを決定づける場面にキャバクラがある。

きっかけは経済的理由や憧れであっても、働いているうちにやりたいことや目標が見つかり、キャバクラ嬢の技術や人脈を活かして次に進む。キャバクラで働いて話し方や社会常識などを身につけ、キャバクラで客から得られた信頼で自分に自信をつけて新しい仕事に進むことができる。次の進路でもキャバクラ嬢であったことが自分に影響を与える。キャバクラ嬢にとってのキャバクラは、進路に悩む女性が自活しながら社会勉強をして人生経験を積んでいくところである。

### 4-2. キャバクラという労働空間

キャバクラの労働で不安なことは、制度面の問題である。キャバクラ嬢と店の雇用関係が曖昧で、キャバクラ嬢自身も理解していないこともあり、制度や労働条件は改善されにくい。キャバクラ嬢の給料は、時給と歩合で成り立っている。労働時間帯が深夜に及ぶため、初めから時給が高く、深夜手当などはない。また労働時間はタイムカードで管理したり、店長が出勤状況を確認して管理していたり、店によって様々である。

キャバクラ嬢には専業と兼業とアルバイトがあり、専業キャバクラ嬢はキャバクラの給料だけで生計を立てている。週5日以上レギュラー出勤をこなし、1日の労働時間は約7時間、客のいない時間は待機時間となるが、休憩時間ではなく特定の休憩時間はない。通

常の労働と異なるのは、専業キャバクラ嬢といえども正社員というわけではなく、休憩時間の定めのないこと、社会保険の適用のないことである。法人として社会保険を備えているところもあるが、たいていは社会保険を備えていない個人商店である。通常のパートやアルバイトは、休憩時間の定めもあり、所定労働時間を超えると手当等の支給もある。キャバクラ嬢は、そもそも労働時間がはっきり決まっていない。出勤時間は決まっているが、勤務の終了時間については店長が決定することが大半であるため、当日の店の客の入り様によって終了時間が変わってくる。

キャバクラでの労働では自分の客を店に呼ぶことで労働時間と歩合給を延ばす。しかし、客を呼べば呼ぶほど休憩することなく約7時間にわたって働き続けなくてはならない。労働時間に見合う休憩時間が取れないことが問題である。

また保険適用がなく、経営者に届けない限り、キャバクラ嬢は給料の内訳表はもらえるが、源泉徴収票はもらえないことが多い。所得税は自己申告である。キャバクラで働く人々は、フリーターとしてキャバクラでのみ働いているか、あるいは、副業として働いているかがほとんどである。経営者も副業として営業していることもあるため、制度面が不安定であるのかもしれない。しかしながら、経営の様子が異なるだけで、他の非正規雇用の仕事と変わりがあるわけではない。キャバクラも他の非正規雇用やアルバイト、パートと同じで、人生のある時期を選んで就く仕事の1つなのである。

### 4-3. キャバクラ嬢の恋愛感情労働

感情労働とは、ホックシールドが提唱した労働形態で、肉体労働や頭脳労働とは異なる第三の労働形態である。女性学辞典による感情労働の定義は以下の通りである(山田2002)。

相手から望ましい反応を引き出すために、自分の感情を統制する労働および作業。(中略)市場(公的領域)において行われるものを感情労働(emotional labor)、私的領域において行われるものを感情作業(emotion work)と区別している。感情労働は女性に要求されるケースが多く、自分の本当の感情が分からなくなる“感情疎外”をもたらす危険性が指摘されている。

武井(2006)によれば、ホックシールドが提案した感情労働は、①人々と面と向かっての接触あるいは声を通しての接触がある。②働き手は、感謝や恐怖といった特定の感情状態を顧客に引き起こすことが求められる。③雇用者は、訓練や指導監督を通じて働き手の感情面での活動を、ある程度コントロールすることができる、と定義することができる。すなわち、自分の感情管理が顧客サービスのうちに入り、自分のみならず雇用する側も労働者の感情管理が仕事のうちに入る、ということである。武井(2006)によれば、感情労働は「自分の感情を加工することによって、相手(顧客)の感情に働きかけることが重要な任務」となっていて、それによって陰に陽に報酬を得ていること、すなわち「感情に商品価値があること」がポイントであるという。

すべての接客業は笑顔を自然と求められることもあり、感情労働であるといえる。この労働では、自分の感情を場合によって使い分けるため、「本当の自分」と「仕事中の自分」が同じ感情ならよいのだが、「仕事中の自分」という「偽りの自己」を「本当の自分」が演じているという状態になるおそれがある。それを続けると、「本当の自分」が何なのか、自分らしさは何か、他人を欺いているうちに分からなくなってしまう。これが感情労働の代償あるいは副作用である。「偽りの自己」と「本当の自分」の対立がストレスになってしまうが、「本当の自分」や「本当の自分らしさ」が感情労働によって失われた場合、「本当の自分

とは何かを意識することすらもストレスになってしまう。

キャバクラ嬢は接客業であり、感情労働に当てはまる。しかしキャバクラ嬢は笑顔や感謝などの感情のほかに、「あなたに好意を持っている」と振る舞うことも求められる場面があり、恋愛感情も演じる必要があるところが感情労働のなかでも特徴的である。このキャバクラ嬢に特有な感情労働の形態を、恋愛感情労働と名付けることができる。恋愛感情労働はキャバクラ嬢のなかでも、特に若いキャバクラ嬢、経験の浅いキャバクラ嬢に強く求められる傾向があると松田(2008)は述べている。それは経験を積んだり、ある程度の年齢になったりしたキャバクラ嬢には、客との間に「いい人間関係」が構築されているので、若くて経験の浅いキャバクラ嬢に客の性的興味向けられるからである。若いキャバクラ嬢にとっては、その客が経験のあるキャバクラ嬢の客であったら、客の機嫌を損ねると職場内の関係を悪くさせることになりかねないし、特定の指名キャバクラ嬢のいないフリーの客であったら、自分の顧客にするチャンスである。だから恋愛感情労働やセクハラを拒否することは難しく、若いキャバクラ嬢には負担になることがある。

恋愛感情労働は、キャバクラ嬢にとっては客を引き付けておく手段であり、客にとってはキャバクラ嬢との疑似恋愛を楽しむ手段である。ここでの疑似恋愛とは、松田(2008)を参考にすると、客が好みのキャバクラ嬢と仲良くなり、相思相愛になり、肉体関係を得るということである。客は、キャバクラ嬢から好意を寄せられるだけでなく、あわよくば「何か」あったらいいな、という期待を持っている。そのため、キャバクラ嬢には触ってはいけないという店側の決まりがあるが、それは守られることが少ない。セクハラは日常化してしまっている。

客からの接触を拒むことは、キャバクラ嬢が客に向けている好意が本物ではないことを示す。拒める場合は客とキャバクラ嬢のあい

だに恋愛感情ではなく、人と人との人間関係が構築されている場合でなければならない。たいていの場合は、キャバクラ嬢の接客の特徴にもあるように、客を褒め立たせるので、接客中は客が優位になっており、セクハラを断って客の機嫌を損ねることはできない。セクハラの日常化や、疑似恋愛で自分の気持ちを偽ることで、キャバクラ嬢は自分の精神を削っている。

キャバクラ嬢は恋愛感情労働をしなければならないことをどのキャバクラ嬢も分かっている、客もまたそれを利用してキャバクラ嬢との疑似恋愛を楽しむ。キャバクラには看護など他の感情労働と違い、「献身的につくさねば」「仕事ではなく心から愛さなければ」という倫理観が求められないため、不安を吐き出すことはできる。しかしながら、倫理観を求められないということや、優しさではなく恋愛感情を提供しているというところがキャバクラ嬢の姿をいかがわしく見せてしまっているのかもしれない。

しかし恋愛感情労働はいつまでも続くというものではない。この章の初めに述べたように、この特殊な労働は若いキャバクラ嬢や経験の浅いキャバクラ嬢に特に求められるからである。彼女たちが経験を積んだり年齢を重ねたりすると、客の下心をうまくかわして自分の思うような接客へと誘導していく技術を身につけることができるようになる。そして客との関係を、恋愛関係から恋愛を抜いた人間的な信頼関係へと変化させていくのである。そしてキャバクラ嬢の仕事は恋愛感情労働から、優しさや感謝といった通常の感情労働へと変わる。

#### 4.4. キャバクラの魅力

キャバクラは一般に「いかがわしい」イメージを持たれているにもかかわらず、キャバクラ嬢やその客たちにとっては魅力がある。またキャバクラ嬢へのインタビューからも分かるとおり、彼女達やその客らにはキャバク

ラは「なくてはならない場所」となっている。なぜキャバクラが彼女達やその客らにとって「なくてはならない場所」なのかを考察する。

ホステスクラブの参与観察を行った松田(2008)によれば、ホステスクラブへ行く人たちは、接待や付き合いという場合もあるが、たいていは下心を持って来店する。下心とは、好みのキャバクラ嬢と話して仲良くなり、自分に好意を持ってきて、最終的にセックスしたいという欲求である。この欲求をホステスは理解しているし、店の経営者も理解して、その欲求を満たせるような雰囲気や店を盛り上げるのだが、実際にホステス嬢が客とそのような行為に及ぶことはない。ホステスはそのような客の下心をうまくかわし、接客中のトークやメールで、客の目的を下心からホステスと客との信頼関係を作ることに変換させる。

ホステスクラブに来る客は、普段なら10代~30代くらいの学歴も高くない女性と信頼関係を作ることや、会話することもない。普段は会社では気難しくしていて、人間関係を作ることには得意ではない。だから、ホステスクラブで学歴や仕事の立場などを気にせず、あくまでもプライベートでいい人間関係を作ることができるホステスクラブは、現実離れしていても魅力的なのである。またホステスにとっても、客とのいい人間関係が仕事をしていくうえで喜びとなっている。関係を作るために話のネタを仕入れたり、店で綺麗にしたりした自分の努力を認められ、ホステスとしての自分がよい評価をされているからである。

この見解については、キャバクラも同様であると考える。客にとっては、疑似恋愛で恋愛関係を楽しむことができること、私的な人間関係を作ることができることがキャバクラの魅力である。疑似恋愛は、キャバクラの高級すぎないカジュアルな雰囲気が、客に「日常の延長」であるかのような気にさせ、「キャバクラ嬢と恋愛できるかもしれない」と思えるために、楽しむことができるのである。

高級クラブは、そのクラブの立地が有名歓楽街であったり、料金が数万円に及んだりすることもあり、非日常感を演出している。しかしキャバクラはどこにでもあり安価であるから、「日常の延長」で楽しめるところなのである。その他にも、キャバクラでの遊び方が客の選択にゆだねられることが魅力であると考える。キャバクラは安価で入りやすいカジュアルさがありながらも、内装は高級感がある。ドレスコードはなく、飲み放題制かボトル制かを客が選択できる。大人数で楽しく飲むこともできるし、キャバクラ嬢と2人だけで親密に飲むこともできる。このようなキャバクラの形態が客に自由な楽しみ方を可能にさせており、キャバクラにはまる魅力であるといえる。

ではキャバクラ嬢にとって「キャバクラがなくてはならない場所」であるのはなぜだろうか。キャバクラ嬢は、インタビューの仕事の喜びに関する質問で、「人との関わり」や「いろんな人と話ができること」と答えた。これは、キャバクラ嬢が普段は関わりのない年代層の違う男性と会話することで、いい人間関係を作ることができること、またそこから自分に知識を得ることができる喜びである。毎日違う人と話すことで、単調な毎日の繰り返しではなくなるし、徐々に交友関係も増えていく。キャバクラ以外の場所では、キャバクラ嬢は学歴も職もない女性であり、社会との繋がりが希薄に感じられてしまう。キャバクラは自分が社会との繋がりを見出すことができ、綺麗にしようという意識から自分磨きもできる、キャバクラ嬢にとっては自分自身が成長して次のステップへ進むための場所であると考察する。

ボーイスタッフも同様に、多様な人間関係を持てることや、違う客が毎日来店することで毎日違う何かが起こることを仕事の楽しみと述べている。キャバクラは自分の頑張り次第によって高収入を得られるが、その分、肉体的にも精神的にも疲労が積み重なったり、常に自分磨きをしていないとあつという間に

収入も無くなってしまったりとハイリスク・ハイリターンな部分に仕事の生きがいを感じている人もいる。

## 5. 結論

普通の女性が経済的理由や憧れを抱いてキャバクラ嬢になる。彼女たちにとってキャバクラは、自活し社会勉強を積み、次の進路へ向かうまでの場所である。キャバクラの労働は、職業の特殊性もあり、条件が不安定である。経営の様態は通常のアパートやパートとは異なるが、人生のある時期に選んで就く仕事の一つとしては同じである。

キャバクラ嬢の仕事は、恋愛感情労働から始まる。若いうちや経験の浅いうちは恋愛感情を演じながら、接客をする場面が多い。そこから経験や年数をかさね、恋愛感情で客を惹きつけるのではなく人間的な信頼関係を築きあげることで客を惹きつけるようになる。そして恋愛感情労働から優しさや感謝が求められるような通常感情労働へと変わっていく。

客にとっては、恋愛が楽しめることや人間関係を作れることがキャバクラの魅力である。また、キャバクラでどう楽しむかが客の自由に委ねられるところも魅力である。キャバクラ嬢やキャバクラスタッフにとっては、キャバクラで出会う人との人間関係や自分自身を磨けるところにキャバクラの魅力がある。

キャバクラは女性が活躍する場所である。どんな女性でも自分の努力で成果をあげられる反面、自身の精神や身体にも負担のある仕事である。しかしどのような職業にも過酷な面はある。キャバクラ嬢は他の職業と同様に、女性が選択し就くことが認められる職業である。またキャバクラを利用する客にとっても、イメージや偏見にとらわれずに行きやすく、楽しめる場所としてより認知されることが必要である。キャバクラは様々な人が集まって、

人間関係を築くことができると同時に、人が成長できる場所でもある。

## 6. おわりに

私がキャバクラ嬢をテーマにしたいと思ったのは、キャバクラ嬢に対する世間の目が冷たいと感じ、イメージが悪いなら少しでもそれを払拭できる論文を書きたいと思ったからである。キャバクラ嬢は綺麗でスタイルもよく話上手であり、私はその姿に憧れていた。しかしキャバクラ嬢の姿は、自分の顔に合うメイクを研究してメイクの練習を積み、食事やトレーニングで体型を維持し、客へのまめな対応や話を盛り上げるために様々な分野の話題を収集して仕事に臨んでいる女性であった。努力で綺麗さや成績を上げるところにも感銘した。そんなキャバクラ嬢の姿が、いかかわしいとか楽しんで金稼ぎしていると言われることに私はすごく残念な気持ちになり、その努力を私が伝えたいと思った。

インタビューで、「キャバクラ嬢のイメージが悪くても、それは世間が勝手に思っていればいい。私にはわかってくれる人が近くにいればいい。」という答えをいただいたが、それもやはり悲しい気持ちになった。この論文が、読んでいただいた方にとって、キャバクラやキャバクラ嬢という存在について再考する機会になればよいと思う。

(静岡大学 人文学部 2013 年度卒業)

フェソその他設備を設けて客の接待をして客に遊興又は飲食をさせる営業(前号に該当する営業を除く。)

### 3) 静岡県警察ホームページより。不当な客引き等の禁止の強化(第 10 条関係)について。

#### 1 県下全域で禁止される行為

キャバクラ、風俗案内所、深夜におけるマッサージ等の客引き行為、ホステス等の勧誘(スカウト)行為、客引き等をさせる行為

2 公安委員会規則で定める地域で禁止される行為  
キャバクラ等(卑わいでないもの)の誘引(ビラまき、声かけ等の客よせ及びスカウト行為、客待ち(客引き、勧誘等をするために相手方を待つ)行為

<http://www.pref.shizuoka.jp/police/kurashi/higai/mewakuboshi.html>

### 4) 2009 年に出版された小説、立花胡桃『ユダ〈上〉—伝説のキャバ嬢「胡桃」、掟破りの 8 年間』幻冬舎に関するアマゾンの書籍レビューから。

[http://www.amazon.co.jp/productreviews/4396613369/ref=cm\\_cr\\_dp\\_synop?ie=UTF8&showViewpoints=0&sortBy=bySubmissionDateDescending#R3GKWGE3RCL2DX](http://www.amazon.co.jp/productreviews/4396613369/ref=cm_cr_dp_synop?ie=UTF8&showViewpoints=0&sortBy=bySubmissionDateDescending#R3GKWGE3RCL2DX)

### 5) 上記の 4)と同じ。

### 6) この意見は、筆者の知人から記述式で 2013 年 8 月に受け取った。

### 7) 厚生労働省ホームページ

[http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou\\_roudou/roudoukijun/minimicum/hiban/](http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/roudoukijun/minimicum/hiban/)

## 注

- 1) ドラマ『嬢王』2005 年 10 月 7 日放送の第 1 話より。
- 2) 風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律 2 条 1 項 2 号。待合、料理店、カ

## 参考文献

- 飯野智子 2010. セクシュアリティ表現とジェンダー. 実践女子短期大学紀要 31: 59-75.  
上野千鶴子 1989. 『スカートの中の劇場—ひとはどうしてパンティにこだわるのか』

- 河出書房新社.
- 下川耿史編 2007. 『性風俗史年表 昭和「戦後」編 1945-1989』河出書房新社.
- 武井麻子 2006. 『ひと相手の仕事はなぜ疲れるのかー感情労働の時代』大和書房.
- 谷本菜穂 2008. 『恋愛の社会学ー「遊び」とロマンティック・ラブの変容』青弓社.
- 松田さおり 2007. お水のヘルプ. 現代風俗研究会編『現代風俗 応援・サポート・人助けの風俗』160-164. 新宿書房.
- 松田さおり 2008. ホステスたちは、何を売る? 井上章一編『性欲の文化史2』183-216. 講談社.
- 松田さおり 2009. 日本における『女のサービス』と企業社会の文化. 谷川健司・王向華・呉咏梅 編『拡散するサブカルチャー 個室化する欲望と癒しの進行形』119-150. 青弓社.
- 三浦展 2008. 『女はなぜキャバクラ嬢になりたいのか?ー「承認されたい自分」の時代』光文社.
- 三浦展 2010. 『ニッポン若者論ーよさこい、キャバクラ、地元志向』筑摩書房.
- 山田昌弘 2002. 感情労働. 井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編『女性学辞典』89-90. 岩波書店.